

学位請求論文要旨
『高杉一郎の改造社時代』

太田 哲男

高杉一郎の改造社時代	目次	
序章		三
(一) 若き高杉一郎		三
(二) 伝記について		五
第一章 「改造」の時代		一〇
第一節 中学時代		一〇
第二節 改造社の創設		一一
第二章 東京高等師範学校と円本		一七
第一節 築地小劇場とロシア文学		一七
第二節 外国語夏期大学		二一
第三節 中国人留学生たち		二五
第四節 円本		二七
第五節 東京文理科大学への入学と放校		三一
第三章 改造社入社から『文藝』編集者へ		三四
第一節 改造社入社		三四
第二節 雑誌『文藝』創刊		三七
第三節 『文藝』編集部へ		三九
第四節 郭沫若と郁達夫		四三
第四章 日中文学者往復書簡の時代		四八
第一節 一九三七年という時期		四八
第二節 日中文学者往復書簡		五〇
第三節 『文藝』と中国人作家たち		五一
《補説》 蒋介石と毛沢東の『改造』所収論文		五四
第四節 中野重治		五七
第五節 トーマス・マン「往復書簡」		六一
第六節 スメドレー「馬」と蕭紅「馬房の夜」		六四
第七節 「マサリックを憶ふ」		六七
第五章 ジャーナリストとして		七〇
第一節 一九三七年十二月以降		七〇
第二節 宮本百合子		七五
第三節 学者・文学者たちとの交流		八〇
第四節 トロツキー裁判		八六
第六章 ヨーロッパ文学の翻訳を通じて		八九

第一節	一九四〇年の輝き	八九
第二節	「朝鮮文学特集」	九三
第三節	東京文理科大学英文科	九六
第七章	日米戦争の開始から改造社の解散へ	九八
第一節	一九四一年十二月八日	九八
第二節	横浜事件の始まった頃	一〇一
第三節	『時局雑誌』との関わり	一〇三
第四節	チャンドラ・ボース	一〇八
第五節	改造社の解散	一一二
終章	戦後の小川五郎	一一五
注		一一九
高杉一郎・主要な著作と翻訳		一三〇
参考文献		一三二

一. 高杉一郎について

この論文は、シベリア抑留体験を描いた名著として知られる『極光のかげに』（岩波文庫。原本は一九五〇年刊）の著者である高杉一郎（本名は小川五郎。一九〇八年生まれ）の前半生を描く伝記的なものである。

私は、小川と同じくシベリア抑留者であった詩人の石原吉郎に関心を持ち、入手が困難となっていた石原の評論を集めて、『海を流れる河 石原吉郎評論集』（同時代社、二〇〇〇年）を編集し、私の「解説」を添えたのだった。この本を小川五郎氏（以下、敬称を略す）に献呈したことがきっかけとなって、小川の自宅をしばしば訪問させてもらい、さまざまな回顧談をうかがうようになった。この論文は、小川から親しく話を聞くことができたゆえの産物である。彼の話聞きながら、これを記録できる時間は多く残されてはいない、しかし記録しておく意義がある、ぜひ書き留めておきたい。私はそう考え、小川の仕事を伝えるべく、この論文を書いた。

二. 「伝記的なもの」

最初に私は「伝記的なもの」と書いた。これは、必ずしも博士論文に相応しい形式ではないかもしれない。しかし、イギリスのように、伝記の位置が高い国もある。そのことに強い印象を持った歴史家の萩原延壽は、『馬場辰猪』から『遠い崖』に至るいくつかのすぐれた伝記を残した。私は、この論文が萩原の傑作に並ぶものだと考えるものでは無論ないけれども、伝記への志向は持っている。私の著書『レイチェル=カーソン』（清水書院、一九九七年）、『ハンナ=アーレント』（同、二〇〇一年）も、一種の伝記である。これに加えて言うならば、最近「オーラル・ヒストリー」を重視する考え方も出てきている。そう考えて、あえて「伝記的なもの」を書いた。

「伝記」と書かず「伝記的なもの」と書いたのは、私の論文の対象である小川五郎が、歴史の表舞台で活動できる場が持ちやすい政治家の場合などと異なり、また、カーソンやアーレントのような思想家とも異なって、雑誌編集者だったということと関連している。編集者は、さまざまな執筆者との交流の中で仕事をしていくのであり、そのため「主役」になりにくい。この論文は、小川の執筆者たちとの交流を描くことに大きな比重があり、思想的・文化史的記述に傾いている。それは、小川が「伝記」の主人公とはなりにくいところがあるからであって、それゆえに「伝記」とは銘打ちにくい。私が「伝記的なもの」と書いた所以である。

三. 高杉一郎についての評価

高杉一郎の名は、冒頭に書いたように『極光のかげに—シベリア俘虜記—』によって知られている。また、『スターリン体験』（岩波書店、同時代ライブラリー）、『征きて還りし兵の記憶』（岩波書店、一九九六年）も力作である。

それとともに、高杉はフィリパ・ピアス『トムは真夜中の庭で』（岩波書店）をはじめとする数々の児童文学の訳者としても知られている。また、年配の世代には、中国革命の一大叙事詩ともいべきアグネス・スメドレー『中国の歌ごえ』（みすず書房。のち、ちくま文庫）の訳者として、忘れがたい名前かもしれない。

話を『極光のかげに』に戻すと、その初版にはフランス文学者の渡辺一夫が「小序」を寄せ、富山房版には鶴見俊輔が「解題」を書いてこの本を評価していた。大江健三郎は、高杉の抑留経験を書いた文章が「戦後文学の最高位」にあるとまで語った。高杉一郎に対する評価はこのように高いものである。では、高杉＝小川は、戦前・戦中はどのように生きたのか。それがこの論文の扱うところである。

四．高杉一郎と改造社

高杉一郎＝小川五郎が召集されたのは、一九四四年であった。それまで彼は改造社につとめていた。

改造社は、一九一九年に山本実彦（一八八五～一九五二）が創立した出版社で、同じ年に創刊された雑誌『改造』は、まもなく『中央公論』とならぶ有力な総合雑誌となった。改造社はその後、「現代日本文学全集」の刊行によって「円本」の口火を切った。改造社の「円本」には、「マルクス・エンゲルス全集」もあった。「改造文庫」を刊行し、『大魯迅全集』など、各種全集の出版をした。さらに、一九三三年秋には雑誌『文藝』を創刊した。小川はその改造社に一九三三年から四四年までつとめ、主としてこの雑誌『文藝』の編集にたずさわった。

改造社は、「横浜事件」などがきっかけとなって一九四四年に解散させられ、戦後に復活したけれども、まもなく消滅してしまった。雑誌『改造』や「円本」の名は知られているにしても、『文藝』の名は今では有名とはいえない。そこで、『文藝』についても紹介をし、小川との関連のある限りではあるが、改造社や『改造』などについても触れた。これは、小川の前半生を描くことを主要目的とするこの論文のもう一つのねらいである。

小川の前半生は高杉一郎の名前で発表された『極光のかげに』『スターリン体験』『征きて還りし兵の記憶』などの著作にも描かれていないわけではない。しかし、これらの著作は、「シベリア体験」と「スターリン体験」を軸にしていて、改造社時代自体をテーマにしているわけではないので、彼の改造社時代のことはそこに書かれたものだけでは必ずしも明瞭でない部分もある。

この論文で私が書こうとしたことは、「戦後文学の最高位」にあると評された作品を書くに至った高杉（小川）の戦前・戦中時代のこと、主としてそ

の改造社時代についてである。それを、彼自身の著作だけでなく、私が行ったヒアリングを通じて明らかにしようとした。その際に、同時代人たちの記録とつき合わせながら、事実を確定しようとした。

私としては、この論文によって、出征までの小川五郎の伝記を書くという当初の目的は達成できたと信じている。

五. この論文の構成

以下に、この論文の構成に沿って要旨を記す。

第一章「『改造』の時代」では、一方で小川の中学時代に触れ、他方でそれと同時代の現象であった改造社の創設（一九一九年）と当時の時代的潮流を描いた。一九一九年というのは、第一次世界大戦直後の時代である。日本社会は好景気に沸き、高等教育機関の拡充が一気に進んだ時代であった。その大きな社会変動は、三木清がすでに指摘していたように、「改造」という機運を醸成していた。雑誌『改造』は、こうした機運に沿って上昇気流に乗った。それは、大正デモクラシーの動向の一面でもあり、小川の子育てにも、この点は関わっているであろう。

第二章「東京高等師範学校と円本」では、一方で小川の高等師範学校時代に触れ、他方では「円本」をはじめとする出版界の状況を論じた。『改造』は、発禁という処分をしばしば受けながらも、日本で有数の「総合雑誌」に育っていった。それは、出版界が「大衆化」していく状況でもあった。と同時に、当時の築地小劇場を中心とする演劇の世界や中国人留学生たちの様子的一端にも触れた。当時の演劇も、ここに簡略に書いたような時代状況と無関係ではなかった。

小川はまた、東京高等師範学校に学ぶかわら、「外国語夏期大学」というところで学んだが、その影響もあってエスペラントを学ぶようになった。現在ならば「ダブルスクール」というところであろうが、これが小川の生涯に大きな影響を与えた。

小川自身は明瞭には書いていないことであるが、小川は東京文理科大学の第二期生として教育学科に入学し、ジョン・デューイの教育学上の著作から影響を受けて、当時の新興教育研究会の運動に関わりを持った。そのため、彼は文理科大を放校となった。この経緯についても、ここで触れた。

第三章「改造社入社から『文藝』編集者へ」では、小川の改造社入社から、改造社の雑誌『文藝』の誕生、小川の『文藝』担当などを描いた。小川は、東京高等師範学校に中国人の留学生が少なくなかったことから、中国人留学生たちとの交流があり、当時の中国の文学にも深い関心を抱いていた。

日中戦争開始以前のことだが、小川が中国の作家・郁達夫と面談したことがあった。郁達夫は日本にいた郭沫若に連絡を取ろうとして来日したのだった。郁達夫の意向を受けながら、小川は郭沫若に連絡をつけることを買って出る。そして、一時は不和になっていた両者の再会が実現するのだが、この不和の解消に小川が一役買っていたというのも、日中の文化交流の一齣として印象深い。

第四章「日中文学者往復書簡の時代」が、編集者としての小川の仕事のハイライトであろう。一九三六年頃から四三年に至る『文藝』の「編集主任」としての仕事の中でまず目を引くのは、一九三七年、日中戦争開始の直前に、日中両国の作家がとりかわす「往復書簡」という企画をし、それを部分的に実現したことである。まずは、魯迅の推薦する作家蕭軍と中野重治の、次に劇作家の夏衍と久板栄二郎の「往復書簡」が『文藝』に掲載された。第三番目の女流作家の丁玲と宮本百合子の手紙の交換は、戦争の進展のために実現できなかったが、「この編集プランの意図は、当時の文芸雑誌に許されたぎりぎりの政治的な発言として、中国に対する日本の侵略戦争に反対することにあつた」という。

この「日中文学者往復書簡」の企画をした理由について、彼は書いている。

一九三一年九月一八日、日本の軍部がいわゆる「満州事変」をひき起こしたとき、私は東京高等師範学校から東京文理科大学へ進んでいた学生だった。東京高師にはむかしから多くの中国人留學生が学んでいたが、このとき愛国主義的な留學生の多くは学業を放棄して祖国に帰っていった。そのなかには私が親しくしていた友だちもまじっていた。黙ってそれを見送る以外、どうすることもできなかった日のことは、いまもつらい思い出として残っている。（『征きて還りし兵の記憶』一七頁）

日中戦争が開始されたのが一九三七年七月七日。同じ年の夏から秋にかけてという時点でのこのような往復書簡の試みは、政治的・軍事的な観点からは影響力はないと言えるにしても、思想史的な遺産としては無視されてよいことではない。

改造社『文藝』には、中国人作家の作品や中国関係の記事がさまざまに並んでいた。ここにその著者名をあげれば、郭沫若、魯迅、周作人、蕭軍、林語堂、蕭紅、老舍、景宋、胡風などである。当時、中国人作家たちの作品がこれだけ紹介されていた点も、この雑誌の特色として見逃せない。

先に書いたことだが、小川が郭沫若と郁達夫の再会に一枚噛んでいたことからうかがえるように、小川は、「ジャーナリスト」というにとどまらず、

ある種の気概を持って戦争の時代を生き抜いたのである。

今日の日中関係を考えるにつけても、日本人と中国人の間の協力関係を想起することは、必要なことであると思う。魯迅や孫文、周恩来などは日本に滞在し、少なからぬ日本人との間に親密な関係を持っていた。このような関係を維持・発展させることは、一九三〇年代に入ると困難になったのだが、全く見られなかったわけではない。このような交流史は十分顧みられるに値する。

私は、二〇〇五年二月二十六日、北京大学で開催された桜美林大学・北京大学学術交流会の席で、一九三七年における『文藝』誌上での日中文学者の交流について短いスピーチをさせてもらった。その際、北京大学側の発表者たちも、私の発表に関心を示してくれたようであった。この経験も、私がこの論文をまとめようとするのに力を与えてくれた。この論文では、『改造』に掲載された蒋介石と毛沢東の論文に触れて、ジャーナリズム史の一齣として言及した。

前述の「往復書簡」の企画とほぼ並行して、小川は自ら外国の文学作品を翻訳して『文藝』に掲載するようになった。その多様性、着眼点の良さが、『文藝』編集者時代の小川の特色である。

例をあげると、『文藝』三七年八月号には、アグネス・スメドレーの短編「馬」が載っている。中国を舞台にしたこの短編は、小川が訳したものだった。また、蕭紅の短編小説「馬房の夜」（三七年十一月号）は、エドガー・スノーによる英訳から小川が重訳したものだった。

さらに小川は、トーマス・マンの二つの短文を『文藝』に訳出した。「往復書簡」（三七年五月号）と「マサリックを憶ふ」（三八年二月号）がそれである。前者は、ボン大学がマンに与えていた名誉博士号を破棄すると哲学部長名で伝えてきたことに対するトーマス・マンの抗議だった。後者は、チェコスロヴァキア初代大統領のマサリックを追悼した文章である。これは、国家がよって立つ基盤について論じてナチスを批判にもなっている論文だが、それは同時に日本の軍国主義的勢力への批判とも読み得るものであった。

小川は、戦後にシベリア抑留を終えて日本に戻ったとき、作家の中野重治にその体験談を聞いてもらったという。それは、小川と中野の深い交わりを物語るものである。その中野と『文藝』の関わりについても、この章で述べた。

第五章「ジャーナリストとして」では、日中戦争以降の雑誌編集の困難さ、その時代における文学者たちとの交流の諸相を描いた。雑誌編集の困難に直面して、小川は改造社を辞して、転職することを検討するに至る。この時代の小川にとって大きな意味を持っていたのは、中條（宮本）百合子との交流

である。時代の厳しさにどう立ち向かうのか。そういう問題を、小川は百合子と語りあった。また、百合子と同様に大きな意味を持っていたのが、三木清との関係であった。

他方、この時代は、ソ連でいわゆるモスクワ裁判などが行われていて、スターリン体制が絶大な力を持った時代である。これに対し、ソ連でのトロツキーに対する「裁判」の真相を究明するために、ソ連を追放されてメキシコにいたトロツキーを審問する委員会が組織され、これに小川は大きな関心を寄せた。というのは、小川が影響を受けたジョン・デューイが、その委員会の委員長であったからである。この経験が、シベリアに抑留された時代の小川の行動を規定することになるし、戦後に高杉一郎の名前で発表された体験記やさまざまな翻訳の背後にあることはいままでもない。

第六章「ヨーロッパ文学の翻訳を通して」では、改造社を辞めようかと考えていた小川がやがて気を取り直し、一九四〇年を中心に、再び『文藝』誌上にさまざまな文藝作品の翻訳を掲載するに至ったことなどを描いた。

それらの翻訳は、S・ツヴァイク「レマン湖のほとり」(三九年十一月号)、E・M・フォースター「戦争と読書」(四〇年一月号)、バーナード・ショー「戦後の世界」(同年四月号)、H・G・ウェルズ「戦争の目的」(同)、ヴィルドラック「小さな文房箱」(同年五月号)、デュアメル「ユマニストの嘆き」(同年八月号)、ハンリ「海峡」(四一年二月号)、フリーマン「神まことを知り給ふ」(同年十月号)など、光彩陸離たるものがある。

と同時に、『文藝』で「朝鮮文学特集」を企画実行したのも目に付くところである。

小川は『文藝』編集者であったから、文学者や文学研究者との交流にも、浅からぬものがあった。すでに触れた中野重治や中條(宮本)百合子、三木清との交流のほか、片山敏彦、渡辺一夫、中野好夫、中島健蔵などとの交流などじつに多彩である。狭義の文学者たちの交流とはいささか異なる交流の様子を描くことも、私の目指したところであった。

文芸雑誌の編集という仕事に携わりながら、その時代の緊急の問題、日本の中国侵略という問題に向きあい、それを可能な言論の枠の中で取り上げた小川五郎の活動、その際に視野を日本の文壇という狭い範囲に限定することなく、ヨーロッパの文芸を活用して「現代」に向きあおうとしたことは、現在でも評価するに値するのではなからうか。

この辺りの経過はほとんど知られていないことと思われるので、ぜひ記録しておきたいと、私は考えた。

第七章「日米戦争の開始から改造社の解散へ」は、一九四一年十二月八日

の日米開戦以降のことである。この時代には、言論の自由の余地は極度に切りつめられる。その時代の様子、文学者や学者たちとの交流の諸相も、この本では描いた。

日米開戦時、小川も戦争への「決意」表明を含む雑誌編集を行い、「特集」を組んだ。この点については、つとに竹内好の分析があるけれども、戦争中の小川の仕事として印象に残るのは、チャンドラ・ボースとの関わりである。小川は戦争末期、改造社社長の山本実彦から、雑誌『文藝』担当から、創刊されて間もない『時局雑誌』の担当に回るよう指示を受けた。ちょうどその時に日本にやって来たのが、インド独立運動のリーダーだったチャンドラ・ボースであった。小川は、ジャーナリストとしての果敢さを持っていて、直ちにボースに会いに行ったという。この『時局雑誌』との関わりについても、小川自身は必ずしも明瞭に書いてはいなかったもので、その点では新味があると思うが、小川とボースとの関わりを、文献的に十分に確認できたとは言えないのは心残りではある。

この時代の小川は、時の政権の志向とはいささか異なる「東亜共同体」論的な立場にあったようである。その辺りの事情も、第七章で描いた。

六. 補足

小川五郎（高杉一郎）の編集者としての仕事は、これまで余り論じられなかった。その理由は、一方では編集者といういわば黒子的性格ゆえであるけれども、他方ではみずから訳した作品をペンネームで発表せざるを得ず、その結果、第三者がそれらを小川の仕事として確認することが困難であったことも一因だと思われる。

また、小川は編集者ではあったが、石橋湛山とか長谷川如是閑のように、自ら論文を書くというジャーナリストではなかった。

その「編集者」としての立場、つまり、特定の立場を絶対視しない立場は、やがてシベリア抑留の際、ロシア人や日本人を冷静に観察する立場に連なり、それが名作『極光のかけに』を生み出す基盤を形成したのであろう。

最後に、「終章 戦後の小川五郎」を添えた。この論文の目的は小川五郎の前半生を描くことであった。シベリア体験記として知られる『極光のかけに』についても、一部を史料として利用はしたけれども、この本自体が読まれば、私としては何も付け加えることはない。その後の彼の著作についても同様である。そう考えつつも、彼の著作が広範に知られているということでもないということを考慮し、戦後の著作についての概観を記した「終章」を付した。